

<前回>オリエンテーション・導入

授業スケジュール

前期：初期キリスト教から古代キリスト教

オリエンテーション——キリスト教思想史について

1. キリスト教の成立と初期キリスト教
2. キリスト教の制度化と初期カトリシズム
3. ヘレニズムのユダヤ教
4. グノーシス主義
5. キリスト教教父1——使徒教父、弁証家
6. キリスト教教父2——オリゲネス、アレクサンドリア学派
7. キリスト教基本教理の形成 6/9
8. キリスト教の国教化 6/16
9. キリスト教教父3——アウグスティヌス 6/23
10. 研究発表・角元 6/30
11. 研究発表・岡田 7/7
12. 研究発表・長岡 7/14
13. 研究発表・山本 7/21
14. 研究発表・金 7/28

<使徒教父、弁証家>

(1) 使徒から使徒教父 (Patres Apostolici) へ

1. 「使徒時代に直ちに続く時代を「使徒直後時代」と呼んでいるが、その時代におけるキリスト教思想の本流と思われるべきものは「使徒教父」の思想である」(有賀、98)
2. 使徒教父の歴史的背景：ユダヤ教との関係、ローマ帝国との関係
第一次(66-70)と第二次(132-135)のユダヤ戦争
課題：殉教精神、異端との対決、初期カトリシズムへ(信仰告白の成立、教職制の確立)
3. 先行・隣接の宗教(とくにユダヤ教)から、イエスの出来事を解釈するのに必要となる象徴概念を受容・改変：イエスにおける神性の経験と唯一神論との関係づけの課題
4. 主要な教説
 - ・「無からの創造」、全能の神
 - ・「神の救済の経綸(オイコノミア)」、キリストの先在、霊キリスト論
 - ・聖餐論(イグナティオス)
5. 殉教者イグナティオス(佐藤吉昭『キリスト教における殉教研究』創文社)
 - ・「殉教が直ちに「神に至る」道である」(有賀、108)
 - ・「彼が排斥している異端」、「ユダヤ主義を非難」、「仮象説」「仮現説」への批判。
 - ・「アンティオキア教会」への責任、「単独司教制」(エписコポス)、「普遍的教会の具体的顕現が地域的教会である」、「感謝の祭」(エウカリスティア)としての聖餐
6. 終末の遅延→制度的倫理的な規定の整備(新律法主義) cf. パウロ書簡と牧会書簡
7. 初期キリスト教から初期カトリシズムへの歴史的展開(制度化・正統教会形成)のプロセスにおいて、キリスト教を担ったキリスト教指導者。正統キリスト教から逆に歴史を遡及するときに、確認できる教会指導者たち。
8. 「二世紀の弁証論者のもとにひとは、ユダヤ教の一異教的環境世界による、もしくはローマの国家権力によるキリスト教へのとく知られた中傷と迫害に対して、はじめて文書による抵抗を示したキリスト教思想家のことを理解している。」(ヴァイシュラーク上、157)
「告発は二つあった。第一は、キリスト教は帝国の構造の基盤を危くすることによってロ

一マにとって脅威であるという政治的告発である。第二は、キリスト教は哲学的断片をまぜ合わせた一つの迷信であるという哲学的告発であった。」(ティリッヒ、65)

9. タティアノス(Tatianus) : 「ディアテッサロン」(Diatessaron) = 「調和福音書」の著者。
10. 「弁証学者たちの「哲学」は、覚知主義者たちの説いたグノーシスと異なって、キリ
11. ユスティノス(Justinus Martyr, --165)
12. ロゴス・キリスト論 : 「人間にはすべて「ロゴスの種」または「種子的ロゴス」が宿っている」、「キリストはロゴスそのものとして、哲学者たちに優っているが、両者は全く別の真理を示しているのではなく、ただ真理啓示の完全・不完全の差異があるのみである。」(136)

↓

キリスト教のギリシャ化(ハルナック)? あるいはギリシャのキリスト教化?

13. 宗教多元性におけるキリスト教(古くて新しい問題)、包括主義?

6. キリスト教教父2—オリゲネス、アレクサンドリア学派

(1) アレクサンドリア学派とアレゴリカルな解釈

1. アレクサンドリアにおけるユダヤ教とキリスト教の伝統
ヘレニズムのユダヤ教からヘレニズム・キリスト教へ、都市的精神状況
聖書の宗教とギリシャ哲学の積極的な統合、聖書のアレゴリカルな解釈
→ ギリシャ教父の思索
2. 「アレクサンドリア学派の神学とともにキリスト教信仰の自己意識は、はじめて、二世紀の弁証論者がまず要請としてのみ主張したあの精神的世界の妥当性に到達することになった。しかもアレクサンドリア人の神学構想は「反グノーシス主義の教父」(第一節)の神学から二つの点で区別される。第一に異端的グノーシスから「教会的グノーシス」への移行によって、他方においてキリスト教の古代文化との総合によって区別される。」(バイシュラーク下、40)
「グノーシス主義を東方的な輸入品として知っていたにすぎないラテン的西方におけるよりもグノーシスに親近性をもって構想されていた」(40)、「アレクサンドリア人はグノーシスの認識の亡霊を封じ込めるためのまったく新しい可能性を発見した。それは二者択一の可能性ではなく両者を総合する可能性である」(41)
cf. アンテオケ学派 : 「歴史的・文献学的研究」「アレゴリカルな解釈に対しては控えめ姿勢」、タルスのディオドロス、モポスエステアのディオドロス、クリュソストモス
3. アレクサンドリアのフィロン : 「ギリシア・ローマ人が追求していた救いへの唯一の道を、まさユダヤ教の聖書が教えているのだという確信」、「聖書に二通りの解釈をほどこす。第一の解釈の目的は、聖書の文字どおりの意味を明らかにすること」「当時のギリシアの文法学、文献解釈学」、「聖書の中に、その文字どおりの意味の他に、いっそう深遠な意味が隠されていると信じ、アレゴリー的(象徴的・寓話的)解釈によって、聖書からそれを汲みとろうと努めた。」(出村・宮谷、122)
二段階創造論 : 可知的世界と人間のイデア、可感的世界と身体的な人間
男性のアダムは理性の象徴、女性のエバは感覚の象徴
4. アレゴリカルな解釈
「アレゴリカルな解釈というのは紀元前六一五世紀以来、まずホメロス解釈において確かめられ、次にペルガモンとアレクサンドリアのヘレニズムおアカデミー学園で全盛期を迎え、聖書全般の解釈の支配的なモデルへと展開された多次元の聖書解釈の方法である」、「アレゴリカルな解釈によって、正にこのテキストの中に暗号化されたより高次の知識が発見される。」(シュトゥールマッハー、97)
5. アレゴリカルな解釈は聖書自体にも遡る。

「10 イエスがひとりになられたとき、十二人と一緒にイエスの周りにいた人たちがたとえについて尋ねた。11 そこで、イエスは言われた。「あなたがたには神の国の秘密が打ち明けられているが、外の人々には、すべてがたとえで示される。12 それは、／『彼らが見るには見るが、認めず、／聞くには聞くが、理解できず、／こうして、立ち帰って赦されることがない』／ようになるためである。」13 また、イエスは言われた。「このたとえが分からないのか。では、どうしてほかのたとえが理解できるだろうか。14 種を蒔く人は、神の言葉を蒔くのである。15 道端のものとは、こういう人たちである。そこに御言葉が蒔かれ、それを聞いても、すぐにサタンが来て、彼らに蒔かれた御言葉を奪い去る。16 石だらけの所に蒔かれるものとは、こういう人たちである。御言葉を聞くとすぐ喜んで受け入れるが、17 自分には根がないので、しばらくは続いても、後で御言葉のために艱難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまう。18 また、ほかの人たちは茨の中に蒔かれるものである。この人たちは御言葉を聞くが、19 この世の思い煩いや富の誘惑、その他いろいろな欲望が心に入り込み、御言葉を覆いふさいで実らない。20 良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて受け入れる人たちであり、ある者は三十倍、ある者は六十倍、ある者は百倍の実を結ぶのである。」（マルコ 4 章）

↓

テキストの意味の多重性の問題

恣意的解釈を避ける方法論、どの意味が基本的か。

（2）オリゲネス

6. アレクサンドリアのキリスト教学校（カテケーシス学校）

校長：パンタイノス、クレメンス（150 頃～ 211 年）、オリゲネス（185-254 年）

18 才

7. キリスト教最初の体系的神学の構築

『諸原理について』

第一巻：神論、墮落論、終末論、天使論

第二巻：キリスト論、聖霊論、魂論、救済論

第三巻：自由意志論

第四巻：聖書解釈

「使徒たちから受け継がれ、守り継がれ、今に至るまで教会のうちに保たれている教会の教え (Ecclesiastica praedication) こそ保存されているのである。したがって、教会的・使徒的伝承と食い違っていないことだけが真理にとして信ずべきものである。」(47)

「使徒たちの教え (praedication apostolica) によってはっきり伝えられた点」(48)

「これらすべての教えを一連の体系にまとめんと欲する人」「明白な説得力のある論述をもって一つ一つの点に関して真理を探究し、例証並びに論証によって、上述したが如く統一的体系を作らねばならない。」(52)

「オリゲネスが意図したところは、キリスト教教理の徹底的な再解釈であった。それはクレメンスが提唱したキリスト教的覚智の体系的確立であった。」(有賀・著作集 5、145)

8. 三一論（神とキリスト、聖霊）

「父なる神のうちに根源的善があると理解すべきであって、そこから生まれた子と、そこから発出した聖霊とは、疑いもなく、父なる神の善性を自らのうちに表現するのであり、この父なる神の善性こそ、泉として父のうちにあり、そこから子が生まれ、聖霊が発出するのである。」(75)

- ・三位一体の内部（永遠の内在的三位一体）の差異性、「力よりの力」

- ・三位一体外部（経綸的三位一体）での働きの同一性、「父が万物を支配するのは者であるのは、子を通じて」

「オリゲネスの体系のうち最もむつかしい部分は、キリスト論である。ロゴスは、すべて

の精神的存在と同じく先在的であり永遠的であるところのイエスの魂と結合する。しかしロゴスは、それを完全に受け入れるこの魂とだけ結合するのである。この魂はロゴスの力と光のなかへとのぼりゆく。」「あたかも」ロゴスが肉体になった「かのように」見える、ということの意味するのである。こうしてオリゲネスは、養子説(Adoptoonslehre)に近くわけである。」(ティリッヒ、118)

9. 自由意志論

- ・罪と裁き・救済の前提としての自由意志
- ・難問：一見反対に見える聖書箇所、ファラオの場合（神がかなくなにした）、譬えによる語り＝「悔い改めても救われるこのないため」。神の全知・予定・摂理との関わり。



聖書解釈学の問題

「神が配慮を怠ったことに滅びの原因があるのではなく、人間精神の自由な決断(arbitrium)に原因がある」(221)、「神によって与えられた動きを善に向けるか、悪に向けるかは我々による」(225)、「まず個々の人間の行為が原因として先行し、各人がその功績に応じて神から尊い器あるいは卑しい器とされると判断される」(227)

10. 終末論

「ある者は最初の代に、またある者は次の代に、またある者は終りの説きに復帰する」「各々の自由意志による働きと努力によって」、「もともとの天が「変えられる」のであれば、変えられる以上、滅びるのではない」(103)、「敵すら服従すると言われているあの終末。そこにおいて神はすべてにおいてすべてであると言われる至福の終末」(104)

「アポカタスタシス・パントーン」

11. 聖書：テキストと解釈

- ・『ヘクサプラ』：聖書テキスト自体の研究、本文と諸訳との比較。
 - ヘブル語本文、そのギリシア語読み、アキュラス訳、シムマコス訳、70人訳、セオドチオン訳の6種を並行して記し、その異同を明らかにする。
- ・聖書テキストに即した解釈方法
 - 人間存在の三重性 → 聖書の意味の三重性：身体的意味（字義的・歴史の意味）、魂の意味（道徳的意味）、霊の意味（神秘的意味）
 - それぞれの意味にふさわしい解釈方法
 - 霊の意味の発見は、アレゴリカルな解釈による。
- ・詩編 101.8「朝ごとに、わたしはこの地の逆らう者を滅ぼし／悪を行う者をことごとく、主の都から断ちます。」→文字通りに、「朝ごとに国の悪しき者を滅ぼす」ということではない。「悪しき者」とは「悪を行っている人間」ではなく、「各人の心の中に浮かんでくる邪悪な考えのこと」

(3) カップパドキアの三教父

オリゲネスの神学的伝統の継承、4世紀の三位一体論争を指導、東方神学の伝統の形成。

- ・カエサリアのバシレイオス（大バシレイオス）、ナジアンゾスのグレゴリオス、ニュッサのグレゴリオス

<参考文献>

1. オリゲネス『諸原理について』、『祈りについて・殉教の勧め』創文社。
2. 有賀鐵太郎『オリゲネス』（著作集1）創文社。
3. 出村彰・宮谷宣史編『聖書解釈の歴史 新約聖書から宗教改革まで』日本基督教団出版局。
4. P. シュトゥールマッハー『新約聖書解釈学』日本基督教団出版局。
5. V. ロースキィ『キリスト教東方の神秘思想』勁草書房。